

みちゆき松の露

泉鏡花作

全一章

番町の土手を二人連、職工か、仕事師か威勢の可
い、一人は、あゝあゝと、酔醒の欠伸なり、一人は
中音で一寸そゝる、唄に曰く、

君に別れて松原行けば、

松の露やら涙やら。

「何うする／＼」と囁す。

「何うするもんか、此の勢で繰込むんだ。」

「牛込見附で汽車に乗はづした處なんざ、餘り此

勢でもあるめえぜ。」

「そこが風流だよ。」

「何處が風流だよ。」

「あゝ、朧月夜にしくものぞなき。」と高慢にい

つて歩行きながら空を。

「見ねえ此の工合の佳さといつたらねえぜ、未だ
餘寒相去り申さずだけれど、づつと春めいて來まし

たね、照りもせず曇りも果てぬ春の夜のだ。市ヶ谷の杜から一面に霞ぢやねえか。」

斜に向う岸をすかして及腰になり、

「ちやうど坂の上の温泉のあたりだらう、ちら／＼と灯が点つて居るのは、あの又霞の中にぼんやりしてるのが可いぢやあないか。」

「汝ぢやあるめえし、何のほんやりが可いものか、其よりか、ね、おい、揚場の柳の方を見ねえ、はつきり晴れて居て格別だせ。」

「だつてアノぼんやりした處も可いぢやあねえか。」

「うんや、判然が可い。」

「だがよ、まあさ。」

「うんや、判然が可い。」

「此男は詰らねえ、妙なことに意地張るもんだ、」

「うんや判然が可い。」といひかけて笑ひ出した、
他もまた笑つて、

「それぢやあまた、お耳うるさうございませうが、
それ照りもせず曇りも果てぬさ、可いかいそれで和睦。」

「可い、可い、然うものが分つたら些と急が

ううぜ。」

「それ、松の露だ、それ／＼、」と立停まる。

「何、露なものか、こりや何うにかして。濡れるんだネ。」

「二三日お天気だものを、他に、だつて心當りはねえやうだ。」

「それだつたつて此頃露が下りるものかい、」

「いや、こりや何本目の松だか知らねえが土手の中でも目立つて枝振が可いや、そして大きいほうはありし、古さうだ、往來へ枝がおつかぶさつてぼんやり月が、おい、また氣にするなよ、ぼんやり月がかゝつてる工合でえなねえからね、すべてもの千年を経れば靈ありで、露がしたゝらないとも限るまいて。」

「道理で人魂位大きさのある露だ、大袈裟にわどつて薄暗くなつてるぢやあねえか。」

「そりやかわいた地へ浸むからよ、葉末ぢやアあるまいし、此男は露といや玉になつて轉がつてばかり居ると思つてるさうだ。」といひながら、ものずきにも、うつむいてじつと透して見たが、俄にあらたまつて、

「おや、」といつて立直り駒下駄のさきでチヨイ

と突つくと、引ツかゝつてむかうへころ／＼と行つた。

「おきやあがれ。」

「様あ見やがれ、はゝゝはゝ。」

「此奴が、知つて居てとぼけたな。」

「知れたこツたな、凡そ道一町が間は是れがまつ

／＼さ。」

一人はつく／＼と歎息して、

「あいつが涙も此位なものだらう。宿にやあ馬糞

がつきものだ、ひどくばかされたい。」

「其處が風流だらう。」

「朧月夜に如くものぞなき。」

「おきやあがれ。」

【完】